Journal of Indian and Buddhist Studies
(Indogaku Bukkyogaku Kenkyū)
Vol. XXVI No. II, March 1978

Pāli *Jātaka* における *mātrāchandas* の形態

——Pāli *Jātaka* に見られる *mātrāchandas* II: §4——

阪　本　純　子

Pāli *Jātaka* における *mātrāchandas* の形態

——Pāli *Jātaka* に見られる *mātrāchandas* II : § 4——

阪　本　純　子

（本稿は,「Pāli *Jātaka* における *mātrāchandas* の性格」（: § 1 序, § 2 土着韻律学における *vaitālīya* 類の規定, § 3 Pāli *Jātaka* における *mātrāchandas* の規則;『仏教研究』第 7 号）の続編であり, 別途発表予定の表 1・2《*opening* の形態》及び § 5 text 修正と metrical licence と伴に, 全体として,「Pāli *Jātaka* に見られる *mātrāchandas*」を構成する。照合の便宜上, 項目には通し番号を用いる。なお, 本稿で扱う材料は, *Ja.* 中の *vait.* / *aup.* 356 *pd.* である。v. § 3 冒頭 c. n. 2.）

〈略 語 と 記 号〉

——特殊な略語・記号だけを記載する。他は慣用に従う。Cf.「Pāli *Jātaka* における *mātrāchandas* の性格」〈本稿で用いる韻律用語について〉——

Ja.　*Jātaka*（固名有詞）——N. 545 は *Bollée* を, 他は E を底本とする。（*ja.* は普通名詞 *jātaka.*）

E　The Jātaka together with its Commentary. I-VI ed. V. Fausbøll (London 1877-96); VII (Index) ed. D. Andersen (1897).——B^{dsf}（ビルマ文字）及び C^{ks}（セイロン文字）の各写本に基づく。

D　The Jātaka : Nāranda Devanāgarī Pāli Series III 1-2, ed. D. Kashyap (Bihar Government 1959).

Bollée, (W, B.)　Kuṇāla-Jātaka, Text and Translation (PTS 1970).

aup.　*aupacchandasaka*
cad.　*cadence* (v. supra § 3 1. 1.)
m.　*mātrā*
opg.　*opening* (v. supra § 3 1. 1.)
pd.　*pāda*
śl.　*śloka*
sync.　*syncopation* (v. supra § 3 3. 1.)
tri.　*triṣṭubh*
vait.　*vaitālīya*
数字　各 *ja.* 内部の詩節番号（N. を付された数字は *ja.* の番号）
a, b, c…　第1, 2, 3…*pd.*
〔 〕　筆者による修正を受けた詩節又は *pd.*

数字の左肩の記号
°　*vait.* ではなく *aup.* であることを示す。
*　底本の形のままでは正当と認め難い *pd.*
†　底本の形がいずれの Mss. にも支持されていない *pd.*

数字右肩の′　*cad.* に問題のある *pd.*
〈 〉　原文への添加
母音の上の⌒　短母音の長母音化
母音の上の︶　長母音の短母音化
母音の上の～　軽音節として扱われる母音

＋鼻音	C_1C_2 又は $C_1^{C_2}$ 子音結合（C_1C_2）の単子音化（C_2 又は C_1 になる）
C_1 ⟨V⟩ C_2 母音（V）による子音結合（C_1C_2）の *svarabhakti*	←→compound の分割

（注） 表1·2を除く§4では＊の表記を，又，§4 2では†の表記を省略する。

§4 Pāli *Jātaka* における *mātrāchandas* の形態

1. 《*opening* の形態》: 表1·2（§5とともに別途発表の予定）

2. 《*cadence* に関する不規則形》

2. 1. *opg.* と *cad.* の境界にまたがる *sync.*（v. supra §3 3. 1. c. ii)）: N. 415 9^a; N. 458 °18^d=°19^d=°20^d=°21^d; N. 545 28^c.

2. 2. 特殊な *cad.*（v. supra §3 4. 2. c. iii)）——a. *cad.* −∪∪−−: N. 112 1^c, 1^d; N. 415 8^a.——b. *cad.* −−∪∪−: N. 449 6^d≒7^b.

2. 3. *m.* 総数に過不足のある *cad.*——a. 1 *m.* の不足: N. 449 †3^a≒N. 454 †4^a（但し共に Mss. の形）; N. 471 °1^c °2^c °7^b †°9^c（Mss. の形）†°9^d (=E, Mss. では 2m. 不足, °9 は v. infra 3. 3. i)) °10^d °11^c; N. 508 °9^a °15^b; N. 545 5^a 8^c 8^d 9^c 26^c.——b. 1 *m.* の過剰: N. 112 1^f; N. 204 2^b; N. 249 1^c 3^b; N. 317 3^b; N. 421 °8^c; N. 449 †2^c（但し Mss. の形）; N. 458 19^c; N. 471 °1^b °5^c; N. 508 °1^d≒°6^d °9^c≒°10^c °9^d≒°10^d °13^a; N. 536 6^c; N. 545 9^a.——c. *2m.* の過剰: N. 471 °4^c.

2. 4. 全体的に崩れた *cad.*: N. 111 $^{(o)}1^a$ °1^b; N. 112 1^a 1^e; N. 421 9^c; N. 454 4^c; N. 471 °4^a °6^b °9^c °9^d; N. 508 °8^c=°17^c °11^d °13^b °16^a (*tri.*? v. infra 3. 1. i)); N. 545 6^c 25^c 29^a 30^a.

2. 5. *vait. cad.* と *aup. cad.* の同一詩節内での混用（v. supra §3 4. 1. c.i)）: N. 111 1 (a *aup.*?, b *aup.*, cd *vait.*); N. 421 °8（a だけ *vait.*→*aup.*?）°9（c だけ *vait.*→*aup.*?）; N. 458 °21（c だけ *vait.*→*aup.*）; N. 508 °1（a だけ *vait.*→*aup.*）°6（a だけ *vait.*）°13（a だけ *uait.*）。

i) supra §3 4.1. i) で扱つた諸例の他に，N. 421 *Gaṅgamāla-ja.* 8^a 9^c も又，本来 *aup.* ではなかつたかと疑われる。前後の詩節は *aup.*（°6〜°9）(但し °6 の一部は *tri.*, v. infra 4. 1. i))。8^a: *sandiṭṭhikam eva passatha* (v. l. E-B^{df}, B ともに *eva* の後に *amma* を付加; *Mahāvastu* の対応詩節（III p. 195 ll. 11-14）は崩れた *aup.* で a は *tri.* の形を示す :*sāmdrṣṭikaṁ paśyatha yāvad evaṁ*)。8^a は本来，たとえば '......*eva amma passa*' のような形の *aup.* であつたかも知れない。9^c: *eso hi atarī aṇṇavaṁ* (v. l. E-$C^{ks2}B^d$, D ともに *atari*; E-B^f *atthari*) は *cad.* が乱れている。*atarī*→*atāri* により

正しい *vait.* が得られるが，*Mahāvastu* 対応箇所（III p. 195, l. 5)：*eṣo atare tam arṇavoghaṁ* の示す *aup.* 形の方がよりオリジナルではないだろうか。

3.《詩節の構成に関する不規則形》

3.1. 5*pd.* 以上を有する詩節：N. 112 1（6*pd.*, v. supra §3 4.2. iii) a))；N. 508 °16（5*pd.*).

i) N. 508 *Pañcapaṇḍitapañha-ja.* °16 は 5 *pd.* を有する。

a　*aṭṭhavaṁkaṁ*[1] *maṇiratanaṁ uḷāraṁ*（—∪——∪∪∪∪—∪——),

b　*Sakko te addā*[2] *pitāmahassa*（—————∪—∪—∪),

c　*Devindassa gataṁ tad ajja hatthaṁ*（———∪∪—∪—∪——),

d　*mātuc ca*[3] *rahogato asaṁsi*（——∪∪—∪—∪—∪),

e　*guyhaṁ pātukataṁ sutaṁ mam'etaṁ*（———∪∪—∪—∪——).

(v. l. 1. E-B^{d} *atha-*. 2. D *adadā*. 3. E-B^{d} *mātuva; D mātuṁ ca*)——(訳) 八曲りの貴い珠を帝釈天があなたの先祖に与えました。それが今は *Devinda* の掌中にあります。そして彼はこつそりと〔この盗みを〕母親に話したのですが，打ち明けられた〔この〕秘密を，私が聞き付けたのでございます。(*Devinda* は普通帝釈天を指すがここでは人名)——bce が *aup.* 偶数 *pd.* を，d が奇数 *pd.* を示すのに対して，a の形は非常に崩れている。強いて a を *aup.* と解する為には，*cad.* 内部で2回 *resolution*（—→∪∪）が起つているとみなす外ない：a_1 *aṭṭhavaṁkā maṇiratanam uḷāraṁ*（—∪—∪∪∪∪∪∪∪——)。しかし，vait. の一変種として，*cad.* 内部に *resolution* を許す *māgadhī* が一部の土着韻律書に知られているものの，pāli 文献に於ては十分証明されておらず，ここで *aup.* の *cad.* 内部に2回連続の *resolution* を認めることには困難を感じる（v. supra §2 及び §3 3.1. ii))。むしろ，この a の形は，第5音節の *resolution* を伴つたいわゆる *hyper-tri.* を思わせる（：⏓—(⏓)—, ∪∪∪∪—∪—⏓；cf. H. Smith：Saddanīti IV（Lund 1949), p. 1151 8.3.1, 01–12 及び –2；A. K. Warder：Pali Metre（PTS 1967), §278；F. Edgerton："The Epic Triṣṭubh and its Hypermetric Varieties," JAOS 1939 p. 159 sqq., spec. p. 168)。但し，*tri.* の *opg.* としては—∪——は稀である。

いずれにせよ，cde は普通の *aup.* の *bcd* に完全に対応する。b も，現在の text では 8*m.* の *opg.* を有する偶数 *pd.* であるが，異常な語形 *addā*（√*dā-* aor. 3d. sg.）を正常な語形 *adā* に訂正し，*te* を *tĕ* と読むことにより，たやすく 6*m.* の *opg.* を持つ奇数 *pd.* となる：b_1 *Sakko tĕ a^{d}dā pitāmahassa*（——∪∪—∪—∪—∪)。即ち，b〜e だけで正常な *aup.* 詩節を構成し，a は後から二次的に付加された可能性が強い。なお，*tri.* と *vait.*/ *aup.* との交代については，v. infra 4.1. c. i).

3.2. *pd.* の分け方に疑問のある詩節：N. 111 ⁽°⁾1^{ab}?（v. supra §3 4.1. i))；

N. 536 6　7；N. 545 29[abc].

i）N. 536 *Kuṇāla-ja.* 6と7に関しては，Eの編集が誤つており，*Bollée* 版が正しい。即ち，Eでは6•7の *8pd.* の中，初めの *2pd.* が誤つて散文として表記され，その結果7は *2pd.* しか持たないことになつている。但し，*Bollée* 版の一部にも，韻律上不適当な箇所があり，次のように訂正する事が望ましい：6^b *yāni→dhanāni*（=v. l. B)：†6^c *yānakaṁ→yānā ca*（≒全 Eds. 及び Mss.)。

ii）N. 545 *Vidhurapaṇḍita-ja.* 29は，Eでは，abが *śl.*，cdが *vait.* として表記されている。しかし，この詩節は完全な *vait.* であり，Eにおけるcの冒頭の語 *bahu* はbの最後に位置すべきものである（=D, cf. L. Alsdorf: "Das Jātaka vom weisen Vidhura," WZKS 1971 p. 23–56, spec. p. 34)。*śl.* と *vait.* の混同については v. infra 4. 1. c. ii), 4. 2., 4. 3.

3. 3. *pd.* の順序に疑問のある詩節：N. 471 °9[cd].

i）N. 471 *Meṇḍakapañha-ja* °9^a はcとdの順序に疑いが持たれる。

a　*aḍḍhaṭṭhapādo*[1] *catuppadassa*（−−∪−−∪−∪−∪),
b　*meṇḍo aṭṭhanakho adissamāno*（−−−∪∪−∪−∪−−),
c　*chādiyaṁ*[2] *āharatī*[3] *ayaṁ imassa*（−∪−−∪∪−∪−∪−∪),
d　*maṁsaṁ āharatī*[3] *yaṁ*[4] *amussa*（−−−∪∪−−∪−∪).

(v. l. 1 E-B^d *aṭhaḍḍha-°*；D *aṭṭhaḍḍhapado*. 2. D *chādiyam*. 3. E- 全 3 Mss. *āharati*. 4. D *ayaṁ*.)−(訳) 8の半分の〔4つ〕足を持つ8本爪のこの羊が，4つ足のこの〔犬〕に，誰にも見られずに藁を運んで来る。〔一方，〕こいつ〔犬〕はあいつ〔羊〕に肉を運んで来る。——物語の筋からは，次のような内容が要求される：8の半分の〔4つ〕足を持つ8本爪のこの羊が，4つ足のあの〔犬〕に肉を運んでくる；一方，その〔犬〕はこの〔羊〕に藁を運んでくる；(そして羊と犬とは互いに食物を交換する)。羊と犬との食物の交換が主題であるのに，現在の text では，羊が藁を，犬が肉を運ぶ事になり，意味をなさない。代名詞の使われ方も奇妙である。更に，韻律的にも，正常な *vait.* である ab に対し（但し a. *-pādo* に修正)，cd の形は崩れている。以上のような事情を考慮すると，cとdは本来逆の順序であつたと推測される。

c_1　*maṁsaṁ āharatī*（Mss.*-i*）*yaṁ amussa*（−−−∪∪−−∪−∪),
d_1　*chādiyaṁ āharatī*（Mss.*-i*）*ayaṁ imassa*（−∪−−∪∪−∪−∪−∪),

この場合，なお若干の修正が必要である。まず，d=c_1 *yaṁ* は当然 *ayaṁ* でなければならない（=D)。一方，c=d_1 *ayaṁ* は，「犬」を指すのであるから近称代名詞は好ましくなく，d=c_1 *amussa* に対応して *aso*（普通，^{Pāli} *asu*<^{Skt} *asau*）が予期される。次に，d=c_1 の *opg.* は *2m.* 過剰であるが，*-aṁ ā-→-ā ā-→-ā-* の metrical sandhi (infra

§5 1. 2.）により解決される。c＝d_1 の *opg.* は，*chādiyaṁ* の *ṁ* を保持すれば 9*m.*，*m* にすれば 8*m.* である（v. supra §3 2. 2. c. i)）。最後に，cd の *cad.* に対しては，Mss. には支えられていないが，Fausbøll と同様に pres. indic. 3rd. sg. *-tî* を考えてよいであろう（cf. F. Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary（New Haven 1953), I Grammar §26. 2)。結局，次のような形が cd の原形として予想される。

c_2　*maṁsâharatî* ⟨*a*⟩*yaṁ amussa*（——⏑⏑—⏑—⏑—⏑），
d_2　*chādiyaṁ āharatî aso imassa*（—⏑⏑(—)—⏑⏑—⏑—⏑—⏑）．

4.《他の韻律との混同》

4. 1. 他の韻律と *vait.* 類との同一詩節中での混用：N. 112 1（ab *śl.*? supra §3 4. 2. iii) a)）；N. 421 ⁽°⁾6（acd *tri.*，b *aup.*）；N. 454 4（ab *vait.*，c 不明，d *śl.*）；N. 508 °16（a *tri.*? 5pd. を有する，supra 3. 1. i)）.（*vait.*/ *aup.* と *śl.* の交代については，cf. Smith op. cit. p. 1155 8. 4，*tri.* との交代については p. 1159 8. 5.）

i）N. 421 *Gaṅgamāla-ja.* 6 及びこれに対応する *Mahāvastu Gaṅgapāla-ja.* の詩節（III p. 191 sq.）は，どちらも *aup.* と *tri.* の混合形態を示す。

Ja.　a　*appassa kammassa phalaṁ mama-y-idaṁ*[1]（——⏑——⏑⏑—⏑⏑⏑—），
　　b　*Udayo ajjhagamā*[2] *mahattapattaṁ*（⏑⏑——⏑⏑—⏑—⏑——），
　　c　*suladdhalābhā*[3] *vata māṇavassa*（⏑—⏑——⏑⏑—⏑—⏑），
　　d　*yo pabbaji*[4] *kāmarāgaṁ pahāya*（——⏑⏑—⏑———⏑—⏑）．

（v. l. 1. D *mamedaṁ*. 2. D *ajjhāgamā*. 3. D *suladdhalābho*. 4. D *pabbajī*.）

Mv.　a　*alpasya imaṁ mahāvipāko*（——⏑⏑—⏑—⏑——），
　　b　*Upako adhyagame mahāntam arthaṁ*（⏑⏑——⏑⏑—⏑—⏑——），
　　c　*sulabdha lābhā khalu māṇavasya*（⏑—⏑——⏑⏑—⏑—⏑），
　　d　*yo pravraje kāmaratiṁ prahāya*（——⏑——⏑⏑—⏑—⏑）．

——（Ja. の訳）些細な〔善い〕行為に対して，このように〔大きな〕果報が私にはある。*Udaya* は偉大なる王位に到達した。愛欲の歓びを捨てて出家した（バラモンの）若者の，何とたやすく利益を得たことよ！——

Ja. と *Mv.* は著しい一致を示し，特に b（*aup.*）と cd（*tri.*）はほとんど同一である。ところが a は，*Ja.* では *tri.*（但し *mama-y-idaṁ*→*mamedaṁ*＝D），*Mv.* では *aup.* で，一部分用語も異なる。内容的には，前半 ab が語り手本人（*Udaya* 王）の行為を，後半 cd が友人（*Ardhamāsaka*）の行為をうたつていると解さねばならない *Ja.* よりも，詩節全体が語り手（*Brahmadatta* 王）の友人（*Upaka*）についてうたつているとする *Mv.* の方が，はるかに自然である。又，韻律的にも，当時の人々によく知られていた

tri. が，稀にしか用いられない *aup.* に，しかも部分的に1～2 *pd.* だけ改竄されたと考えるのは困難である。逆に，本来は *aup.* で作られた詩節が，後にこの韻律の衰微に従つて，徐々に *tri.* に変形されたものと考えられる。従つて，a の形は *Mv.* の方が *Ja.* よりも本来の形により近いであろう。両者ともに *tri.* の形を示す cd に対しては，次のような *aup.* の原形を想像できるが，*Ja.* text としての正当性を主張するものではない。（*kāmâratiṁ* における compound 前肢最終音節の重音節化については，v. supra §3 3.1. iii), infra §5 I 1.4.）

c_1　*suladdhă↔lābhā khŏ*（或いは *va*？）*māṇavassa*（∪－∪－－∪－∪－∪），

d_1　*yo pabbaji　kāmâratiṁ pahāya*（－－∪∪－－∪－∪－∪）．

ii）N. 454 *Ghata-ja.* 4 は，文脈的にも韻律的にも奇妙な詩節である。

a　*sovaṇṇamayaṁ maṇīmayaṁ*[1]（－－∪∪－∪－∪－），

b　*lohamayaṁ atha rūpiyāmayaṁ*（－∪∪－∪∪－∪－∪－），

c　*saṁkhasilāpavāḷamayaṁ*（－∪∪－∪－∪∪－），

d　*kārayissāmi te sasaṁ*（－∪－－∪－∪－）．

（v. l. 1. E-Mss. *maṇimayaṁ*）――（訳）黄金製であれ，宝玉製，銅製，或いは又銀製，貝・石・珊瑚製であれ，私はあなたにうさぎを作つてあげよう。――

正常な *vait.* の形を示す ab は，N. 449 *Maṭṭakuṇḍali-ja.* 3 の ab と全く同一である。ところが，後者では，内容は異なるが，cd も前後の詩節もすべて明瞭な *vait.* であるのに対し，この N. 449 4 では，d が *śl.*，c は分析不能であり，前後の詩節も *śl.* である。のみならず文脈上も不自然で，物語の展開上不必要である。即ち，この詩節は明かに N. 449 3 からの盗作であつて，ab をそのまま残し，cd を新しい *ja.* に合わせて作り変えたが，韻律的に失敗して痕跡を残したものと考えられる。

この 4 に限らず，*ja.* 全体を通じて，N. 454 は，N. 449 及び一連の他の “*śokāpanodana*（死者に対する悲しみを取り除くための物語）” の *ja.*（cf. H. Lüders: “Die Jātaka und die Epik,” ZDMG (54) 1904: Philologica Indica p. 80 sqq.）からの著しい影響を示し，独創性に乏しい。

4.2. 他の韻律の如く編集されている *vait.* / *aup.*: N. 317　1　2　3（→*śl.*）; N. 449　6（→*āryā*, v. supra §3.4.2. iii) c)）; N. 545　29^{ab}（→*śl.* v. supra 3.2. ii)）.

i）N. 317 *Matarodana-ja.* の全 4 偈の中，1～3 は *vait.*，4 は *śl.* であるが，すべて *śl.* の如く二行詩として表記されている。更に，E では 4^{ab} が *śl.* とも *vait.* ともつかぬ奇妙な形を示しているが，D 及び $E\text{-}B^{id}$ に従うと正常な *śl.* に修正される（v. infra 4.3.）。

4.3. *vait.* 類の如く編集されている他の韻律: N. 317 4^{ab}（*śl.*→*vait.*, v. supra 4.2. i)）.